美濃乃家畏 下

内閣文庫
和書
類
一八二一六
瓶
冊
二〇〇函
六架
(八中)

内閣文庫
番號 和 18216
冊數 8 (8)
函號 200 68

国立公文書館
National Archives of Japan

春鶯舎

義濃のあつまり添下の郡

風俗歌

春の日上

順德院御製

第九元年百首歌合に雅経

ながめくる日ぐもしまがきよりゆくえの雲のなびくを

下の法師ちかき風の雲を吹とくあらしにのこる雲のこゑ

さびしさはそことも雲のなびくらむ

ゆくへもしらぬあらしのなかの雲のふくかぜ

後京極殿御改作大臣家百一首合

町田文成獻納之章
淺草文庫

春夜暁霞　　定家卿

初瀬山かたぶく月もほのぼのと霞にもるゝ鐘の音[illegible]

鐘の[illegible]霞に[illegible]月も山の[illegible]

百首御歌の中に　　順徳院御製

ちくま川春ゆく水はすみにけり消ていくかの峯のしら雪

春の歌の中に　　後京極摂政

春の[illegible]花[illegible]霞[illegible]

[illegible]花の[illegible]人の[illegible]

[illegible]なが[illegible]

題しらず　　宮内卿

[illegible]山の[illegible]

春歌中

題しらず　　定家卿

春雨に[illegible]

[illegible]

[illegible]

いつも[illegible]松の[illegible]山[illegible]

四の[illegible]桜[illegible]の[illegible]

春歌下

水上落花　　従三位秋政

くもしけ川岸の流れにさゝなみやたち帰りつゝ桜ながるゝ

詠白き花のちりてすゝむがかすみの花をさかゆるやうに流るゝさまに

今ぞよしなし川に流るゝ花をまことに桜が根にも消ゆくやうに

かくゆるに何をかかやとなし。

夏歌

人々百首歌よませ侍りし　　宮内卿

はかなしやぬれてまた見ん花の色とぞ夜のまに移ろひゆかんたよりともなきを

なきものおもしろくて富士の山も玉川の里にかゝるさま

許多おもひてつゝ見ゆる出て同じ趣にやや。

夜ぞふかきの中に　　後京極摂政

あやめふく軒の雫に袖ぬれてあやめもしらず夜ふかしの月

すゞしさは雨にもぬれて、いづくにもすゞしさのみぞかよふなれど

あやめさへもとの軒ばにかへりつゝ夜ぶかきのみぞ

軒ばの露とともにいはでそれをやすらふ

かくいふをも猶なりし。　又五月のよしなしし軒に

菖蒲もかをしいづくも見えねば、雨はらふといひ、夜ぞふかき

いへばこそ五月雨にふりつゝとにかくにかれば五月にふりつるあや

久方の雨ふりそそぐべれば雁なくなり又雁もなくなり

秋部上

後京極摂政太政大臣の百番歌合の歌

定家卿

秋来ぬと目にはみえねど風の音に思ひのかぎりなりぬるかな

山ぢかくしかの鳴こゑ聞ぬれば秋の夜ながら思ひ明かつる

野の露にあさ立ちぬれぬ秋の夜の月の光のおきてなりけり

恋歌三

後京極摂政太政大臣の百番歌合の歌

寄風恋

ちはやぶる神の御代にもかかりけん風の音にぞ聞てやままし

神代にもかかりけん風の音にぞ聞てやままし

ふく風をなにとしるらん人しれぬ思ひ入野の笹のうへ

ふく風をなにとしるらん人しれぬ思ひ入野の笹のうへ

三の句を人しれぬ恋を書添き

あさかぜにしらぬ恋をしるものとなびかしそめし人の心か

あさかぜにしらぬ恋をしるものとなびかしそめし人の心か

ほの句を自然のまゝ

ほのぼのと明ぬるかたの白雲に木の葉をわけし山の端の月

ほのぼのと明ぬるかたの白雲に木の葉をわけし山の端の月

結句を秋ぶかきかな

○本歌乃句を略す法下のごとく

秋をあはれとも。

恋部

遇不逢恋

宮ぬしの

こひしさはいまぞ思ひしる月をまちかねしもよりの風をだに

二夜の夏。恋死。世にすぐれ。すぐれ。

ふたのるまで。れまぬ。月をまちかねしもよりの。この夏を思ひ。月を

見るにつけて。なげくにあるる。今かより。結夏。思ひ。月を見

れば。なげくるまが。笑れ。あまりにまちかねしもよりの。

雜部

雜部上

歌

宮ぬしの

春の日の。ながきにつけて。ものうきは。やどもとうるし

をもて。八巻の。ながなり。世を。春。春。ながきにつけて。

なりれば。世。春。巻のまきをあまたんこそ。れぬるとうふ

ぶくかなつべれ。春。たちうんぶ。そこうらびはもえ

ぬるとも。世をまぬ。知べきふあらぬや。

雜歌下

建保三年ゆきの花ゆるうら広百首 宮内卿小辰市

○天皇乃本紙を打流下の出

後しの海の道ふりしづかなる春の市やいまもすぎまさらぬ像さの集

ひ[illegible]百紫のかすみのうちの市とふさとりもゆきもいまもすぎ人

をうゆるしもやなし

毎年のいとひふかゆるかぜ。ちりの山乃中堂ふるゆりて

ゆかりなるふ巣もものいとしくまさりてあつ。文つの

もとさしめ。おびつうかきて車もぎこそおくふてみをそふ

うろや。をふかすもうちん山ふみあくのこ。をうりえて

ちて。とうとうとうへし

うらもふ孫ぢ。嵐のうへの孫やうらみやとの。をようしうるうろ

二三の白。山ふ氏孫ふ。あらしのうへとうつ。　秋の。をう。

京ふ。文つの。山のおくふとうとうとうる。をう。　うう嵐

ふ。嵐のうへとうふつまうて。いつ。嵐のうへを。波とゆくうう。

下白よりも。初白へ。ゆうへのそこ。ふれをうれしうとうひおこせ。ひいく。

をうううへり人ゆ。文つのへうへ。いかしくふひ。ふるへ。孫夜

文ゆどううもし。ゆうびとう。さて。文嵐。ぎ。ぎ。山ゆ。れ

たぢ孫ふ。ふいとぢ。孫ふ。ゆもぬううゆうる。

新千載集

春歌上

建保三年百首会ふ野外花　雅経卿

春日野はたやすらふ花の色を夜のしぐれみのそぐれぬる風ぞふく

なに人か春日野の雪の朝の花をまがへるまで夜もすがらふる

春ちかしふるさと雪の夜の花をまがへるまで。一そ

のそこ雪の春を吹こぶ風の吹こぶかぜのまがへるまで

雪のやどる花ぞの梅のすがらしてくるぶるまで夜のごとく

なりぬるかな。　なに人の朝の夫こびなそのまがへるまで

たんぶごとくに引くくるぶとしくちかるも。　下句新しいとくちかふ

花やうなれどそこあるこそほのうちおぼつかしかぶろけ

ろ人のかぶすでをまねびくこそきこんみそえもいとぬぐ

こそ　ぬぎぬめぬべき。

帰雁　定家卿

雁ぞなほおのがあまぐ雲ふ風ふつばらくこそ春のうめが枝

初白父雁こそ春のあまぐ。　二三の白ハ秋ふなるこまふどいとこそ

なるこをうくみとこそ料ふかくいとり。　うこそ帰り

ゆくまの雁を初をうくこそ春ふるこそいとる。

こそじこそ今ふくくみくこそむこそいぬこそ秋ふめふぶ文まま

かくくこそ雁ぞ春こそ。

春二十下

元久二年詩歌合ふみつかの春を

寄雪梅

初二句はきさらぎ波やわかなのうへにしてゆきをれ
じるこずえのあるをよしとする也。はの白と雪の
ちらぬ間はうめ也。ちりぬるのちはゆきをふ
まじるべし。たゞ雪の引き。梅の枝を今
はなれ花のこゝろ。ゆきの引き。梅の枝を今
のあるべきこゝろぞ。本歌の本意ふかくこそ。

秋部上

月前風

後鳥羽院宮内卿

あらしぬる秋の末にはつかくもりぬるをはらふ秋風
ぬるゝ二つ。

羇旅部

道仁親王家百首

○天徳内裏歌合の方法下の巻　八

[illegible]

[illegible]

のめぐりあつまるべし

哀歌一

後京極殿[illegible]百首哀歌中に

如願法師

思ひつゝ[illegible]人[illegible]れ山ろ下ふる月の[illegible]

[illegible]

哀歌三

六百番歌合ニ

[illegible]

○天[illegible]

恋哥五

名所百首哥めしける中に　定家卿

琴の緒もたえぬる笑(?)として絶えずの橋の中も絶えけり

初二句は琴の緒の絶えたる人の心にくらべて絶えずの橋の中も絶えけりといふなり。

人の心のかはりやすきをいはむとて、琴の緒もたえたると聞えたる中に、絶えずの橋の名をあはせて、歌のくはしき中にいへり。

なかなか絶えぬ中もたゆると、絶えずの橋のその名にそむく心なり。

料に、絶えずの橋のいかにもまことなる名といふべきかなり。

中絶えたるによりて、歌のくはしきいふべきなり。歌のくはしきは

木陰とよる中の絶えぬといふことのとりなしかたなり。

歎しし人　後京極摂政前太政大臣

何となくかくもしらぬ逢ふことも思ひておもひのかなしき人の心を

知る事のなきもの数のかなしさは物おもふ人の身にぞ知らるる

心得べし。初句は通ひ路のうへを見わかず。二三句の句

は恋しき人に逢はで、さびしくなるによりて、恋しきかなしさ

して、逢ふ人にもあひかなはぬなり。絶えて逢ふことのなきは

ただ絶えずの橋のかけもなき中の心を

うち絶えてぬる中に逢ふことの絶えぬよしを

みえけるにして、絶えの逢ふのかなしきなり。

[illegible]文賀歌

建仁二年秋の不老山[illegible]九十賀[illegible]

何の屏風[illegible]

[illegible]山の[illegible]の雲の[illegible]年[illegible]のひろ[illegible]

初二百[illegible]仁和の法[illegible]花山の遍照僧正[illegible]

[illegible]例[illegible]

[illegible]道の[illegible]

[illegible]年[illegible]賀[illegible]

[illegible]道の[illegible]

新拾遺集

雜部

建仁元年鳥羽殿[illegible]合[illegible]山院部乙

定家

ほ[illegible]ぎす山の[illegible]

二三日の白[illegible]

[illegible]山の[illegible]

[illegible]

雨中郭公

後[illegible]

月新たにいたりて春毎の花もいまを盛りとぎすは

秋部 一

秋の月 家隆

雲ゐはかすかに残るこのあたりふくかぜ冴ゆる秋の夜の月

秋のあるこの月はかりもいまは春日山とりしりおぼえる

べきかぜにいまは春日山とりしりおぼえる

たくしふかぜあれはまきるべれど月ぞ

まかに春日山秋のこの月おかしくこそあるべ

山とりあしくあるほしくこそ

野原

さかりしの春のあとの花ぞ山ぬまどかくるゝ山もまた武蔵の原

清歌 順徳院御製

海原はやかの原をあまのまるもかくれぬべくの神の和

原をあまのまるかる原ふかの方なのまふくれだ

まるかるかはくるめ

霧 藤原

寄芝法師恋家千年ふ旅 みとも

掘ふまるもくるめし旅衣ふたやぎの萩ふるでも

二の白、京をこそもしと、夜をきくらしとをかねてるこそ
も夜の孤心、昔の白、今日くるとひけるとこそ
ひるるほしくれどせんうもし。　花ぞるとも、梅ふ
むくく、袖を、萩のうのあふ物をつゆ。　一そ、人やこを
ぶ、ぞ、そこもふこそもしうぞこのそもなり。

袁傷　并

百年　全光

末の露涙ぞかたをもつゆ　わが身ひとつの秋のはつ白
初白、年歌末の露　別の色やこの世、世の色なる

如法つ

よしまさ卒ふ法ぞうもしいとおもさの草ら色を
養の車ふいるる、下白、ぞ「新月」とつの秋ふあらね
どのこそふ、世の色なるこをを見べ、ぶ、面も、物ひ
ふ秋のぬくらぶ物のうふ、きこそ。　月白ふ、雲をうけ
今ぞこそめり。　又下白、波のこをもこせこそ。
後を月波ぬ秋ふ、せ弱ひこの波月ふ法法ん、こ

順德院御製

同じ世のわのれを秋ぞ老のぞこ、ゆく月のこ秋の形ん
うれをこれこう都の月ふ、おこ、まこぶ、波波と伝渡と、
こるのふふこをもれ、、、こしこの法ふのれこもぶ、ぬこ

より別てハおもしろからず。つまりども世におもしろき月なれバ同じ
世の内なりしにかくれまさる様へバ同じ世をわすれまへらん。
程とハいかやうにおもしろきまでおもしろしつれバともに心ざしのむ
なしく。　下の句ハ月をいづこにてくもりの月なれバ同じ世
此物なかりし雲のよそなる所にて居る所をそれにて居る
それにてなかりし。父帝此清和天皇と御譲ありけれバなんさ
とくその月を今ハ同じ世にあるに。父帝と同じ世にハあらねバ
かしこまりて此世ハかなしくおもひし悲しき事なりしか
をあそれなる御心なりし。

意解一
吹からに秋の草木のしをるれバむべ山風をあらしといふらん
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宮　文屋康秀
かひなく秋に吹しくしく秋風よりこころの色をも色をかへてやハらぐ
むべ山風のあらしとなるを根こそぎ山おろしの吹風を人におもかげやさし
つくやらんけしきおもしろき趣なり。むべの二三の句を
草木に吹しくしをる色の木と吹なるを悲しき心にもならしけるとも
色ある草木も吹バあらしとなりけりとも、秋人の深き心をバみよ
しらぬ吹つくるぬとなくく。

戀歌二

寶治二年百首歌奉りし時　寄雲戀

八條院高倉

まちねてこひたびはあふの夜の衣にかさねてもつきぬ袖の白玉

本歌　今やとも思ひそは露のいのち知らずし。　白玉ハなみだなり本歌の露ほどし命のたへもあるべき濃のかねてはの袖の袖の白玉へいはそしその露の縁語也し死ぬといふことをまてぬすむにてたびは新すうすら見ゆかり。　あふの衣の夢に六人のあはれるなやむる夜の衣の比ふをさらふ。　衣の夢にうけてもしほ露の縁語なり。　かけても八衣の下句の

ごとくおもひし入ゞも一命をかけてこそ我ゆゑにつらさ八人のはらきなり。

戀歌四

光明峯寺入道攝政家戀十首歌合に寄霞戀

定家卿

ゆく夜の花のかゞみの影もうしはづかしく見えてうつしもやすらん八

本歌　年をへてものかゞみとなりたるハ見ゆる花こそうつれ

ぬ花の影のうつれるをよめり。　うつしもやひまきかぶらぬやま

まさに春を花のうつれ方をもよう事なり。　此歌戀のことをや

えびすこで花の宮く。

意寿丸

細流拾改本百そのふ怒意　宮くもつ

おの花ゆえなるものさそこそとうつくしくへよりしく書ふ治ごすもしし

三三の白そ侍勢物語ふあるよりのうひをる

ものるとあ泉をさりて流く作ものるまし

まふりしくえふてそ有られとてみををたれりゆ花ごそ。

彼物語の泉ゆ言をそ今をそ。きそそ陸ふく。

神祇寿

恵比須師ゆ物をそふ　宮く永つ

うまをとをもおすごをそ世をゆ天情りをを

初二月ゆ宮ふ通をしふ。十月ゆ伊勢神の氏事ゆ。

世をよ千ゆしくしゆ。うきをくゆすごをしゆ。

をゆ今をうり。

釋教歌

如寒者得火　寿美法師

ゆ花のゆえはのあらしをゆびをて。ゆるの影ふあるごう流しを

この二首ともに行きて帰るをいへり。二の句は懐旧に書きて、
すでに前の水無瀬と新古今とに釋教の部にあり。
殊に法華経の薬王品の文にて、經の引證と
たとへたる歌なり。

新古今上

道助法親王家五十首歌に帰雁

雅經

かすみゆくよものこのめもおちこちに　おほ山かせにかへるかりがね

〇此歌はかすみしかへるかりの稀なるつゞきぞまし、下の句にいかにも山

なるにやといふべきを以て、花の山へかへる雁をいへるにや
いはゞ文殊の寺のさまをもいへるにや。

石清水宮歌合に月前霞　正三位知家

横雲は峰にわかるゝ山もとのそらにかすめる月のかげ

題不知五月雨　宗家

さみだれしどろの軒のあやめ草さみだれあがるいく東風
五月雨の頃もふところに軒のあやめをみづからしるへの
さみだれしどろなるに、それどもあやめ草のことになりてしるし
いはゞ風にさらしてしれし文をしるしどろに落るをしるにあやめ
みづからいひて、いはゞしるにしるしどろなるよしあしきて

いくへ。文束の眺めとも江の白まではつかりもあしほ。

歌の意をもしつべし。

雜部中

名所百首歌よみ侍りけるに　定家卿

まちこひし昔は今に志のばれてかはるまゝに見えし三河の濱松

此歌いにしへこゝろえてやもゆ大伴の三津の濱松まち

こひぬらむ。今にも今にいづるとなり。取りん是。

昔見しつきもまちこひし昔に縁あるなり。

えいじて松に縁あり。

新後拾遺集

春歌上

建仁元年五十首歌たてまつりける時　定家卿

和泉の海やそよつまも小あみ坂の山下の風ぞくもるかぜのふく

猿田彦浦風も哉ゆる高ふくあみやこそかすみし世を

風にあふ雪ほしき去年に春にとるやあればさらん

さのかすみもなるべし。

千五百番歌合に　雅經卿

曉やらぬ雲に霞む花の風にかすめるあかぬみよしのゝ山

にの白よりこれあはれ。こゝ花はかぶりなれば
あるまじく。あやまりなるべし。
もし洗ひなるべし。

春部下

百首うめのはなしついでに　順徳院御製

春のきぬ花をもとめしらぬまに三輪のひばらに花のかをる

万葉ふいはしへよりそなれる人もあるべしやこのむべらふぼ
をもとめなり。　二の白は花をしらぬとふふれ　春のこと
年をもとめぬとをもとめなり。　かざしは桂原を三輪山

入ぞ[illegible]してとをもとめなり。　春のかざしを折う
ざしして帰る時ふりかへて。　一その時をは三輪山の花
なさうべしつもりしの桂原をもとめ給ひしとおぼし
めしつるなり。三輪山も花は桂原のかざしを花ふりうへ
て春をこれかぶべきふ花をもとめくそもかうらば桂原を
るは花をしらぬぞしうれとく。

建保三年百首　定家卿

いそつじしいでや海る志のゞ山こゝろはたづねく
由ふ志めゞ山思ひこゝろ道中ゞれ人のこゝろはおくと
入るべく。　いそでやこれつるはなれ二の白はこゝもべられぞ。

○天院の中納言の打絵下の中の

人のをれおくるをあるめるふさやるうけ合もおきてとさち。
海くで海しまどあらばんのおくふよくうけ合つべきをや。
百そ法師よりまさおひるる中ふ　順法院伊勢
みるの海ごひの山れまのをふ知るまずらぬをつじし
まごひの山まをふりんめそれまるれまるれのをふしひ
こうけてまのをとよりまおつるまのをまし。海じ
ちぬをかとしかぬそこ。はくじみをまをなり。
九条兼実内大臣家三十首の中ふ海上眺望
宮くおつ
姫はまぐ海のをぶ孫行まやこおかじまをもをふひら

なを海ふるとえそぐたちしふれをををしふ人をひ
をくるまを。　海のをぐねいで。ひの中ふる船をいへ
るをや。　三の白を雪の京ーれを惜をるをやらぬまり
をくおを雪れをぐ帰つまのをををふくめ同じををを。

夏部

題不知百そ分をるしをる時　宮家つ

姫の雅の衣ー秋をまつーぐ初をる山のれぐすぐしれ
和を不りをくを分をまりを時　後京極摂政
松をををふをのみををのをすぐ今もふうををあをり月風

よるのみちのの松ふく風つゆ見のふくとしてよもやあらじ
ぞとろなくてたゝあぢきなひもあきかぜ侍きをまふ
うぎよよるのしらゝ雲たるさくてたゝとしふ後恵法師
しあれど心ぎりしゝ通しし。

秋部上

道保百首 宮内卿

きゝぶのかゝふよるはかく藤の花ふそゝまぶつろふむさしの原
初夏 次のよるへひかてゝうつろふ藤古今
ふ八重とあり。されば若ぶかゝふあぢとられとなるかるゆいふふるゝ。

むさゝゝみとはよみ重りうちんゆ秋ぶ原のうゝてゝ。
泥の秋ゝ源のうゝりゝれまいひゝふゝ月の源やみぐ
を深ゝんとふふるゝゝそのうゝるゝるゝぶゝゝ深ゝゝ義ふ
のうろひるむゝゝ野ゝいふゝゝるべしうつろふ源のゝ
ゝゝるゝのうゝをかゝゝゝべし。ぶれぶやぶゝゝ河へ。
名不百首 なりて月
初丁のゝるゝゝゝのゝかれ藤そぬゝづくも秋ゝへるゝ
二の白。来ぬるなとひうゝゝ。 ほの白ふ光盤牡ゝるゝふ
深ぬゝゝゝゝぶゝ月ゝ風ゝ月ゝ源の藤ゝふ秋
のゝへゝるゝへ月の源ゝ月ゝ深ゝゝゝ。

建保三年歌合に秋野月　俊成卿女

思ひいづよ露を一夜のまくらにてさゆるみやぎのゝ袖の月　新

古今秋の野のまくらかりし秋の袖よりもあはれこし名ぞ

むさしやまうかぬうた也。古歌のまくらしたるは草ぶかき野辺

露をしほるは秋の野の仮寝をしたる時によめる歌也。

一夜のかりねは古今にあはれこし一夜の枕見えし。　一よそれにて

野秋の野に今みやべのかりねをよみ。袖の露は一夜人にあは

でぬれし時の袖の涙に似たれば古今一夜の枕の人あるなどおもひ

いでらる月影もさえ一夜の涙をも思ひいづらん。

題しらず　有家卿

まよひくれなゆる野中の道をたどりつゝかれどもみちや月もすみけらん

さしぐもれどたどりしむそよけれどもとまる。　注自すむは安の流

にのまよひすむかよはせくるぞかり。

秋歌上

題しらず　　　　　　　　　の

末の松まつ秋ふきゆく雲はれて波よりいづる山の端の月

此の句は末の松山を波のこすてふとしくよみあはれ人々の家

隆々の波にたとへて横雲とおなじく海なり。　此等の

二三の句、月よりもかゝり此の句人の心のうつるよしにて、意の言う。

[illegible]

秋の夜のふけぬるまでもそなたの月をながめしらでぞ寝ぬる

[illegible]

[illegible]

あたらぬ月のうらむるひの雲のせきもあらばぬすみもしぬべし

初雪もむらひの波の落の雲そらふるとも。　下句はいと

面白くもあるかな。ぬれぬるよむらひの時雨ふる

[illegible]

雜秋歌

百首歌奉りし時　左京大夫顕輔

立田山しぐるやもみぢ葉ぬらんかの波もろこしの月

恋部一

逢恋二首百首歌奉りし時　定家卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○天保八年刊本の頁　○二十三

水上下を八月合られたる河内合戦の事ハ
あまたのことの事ハ上に書へぬるなれ
ども紙とぼくしるしてかくこと
なるべき人をいつき
おもしろ百首
あづさゆみいそのかみのうらまつ
上句ハ間よりてるれ月なれ
梓弓いそのの浦をしもみるへ
るあしふきまきちるをみぬれ
ども月ハ今ハ春ものこ
ろ

意訳四

まふ百首を合ふ　宣秋門院丹後

中〜ことてはやまとあふ坂の関はあるやこの行かたしら
これハ逢坂の関をゆるをたのみてこそ
こゝをもたのみあなかちと
いはるいでゝ逢坂乃関はたのもしこと
いまだあつぬかどぶとそいへ
紅しら浪
西行法師
まつとせしまつひぞるの
山乃端の月
山乃端の月
ひとりのみそるなるとのふ

雑歌上

読しらず　　家隆卿

さくら花あハ雪と見えて老の波来よする和かの浦風

三四の句ハ年老てかしらも白くなりたるを云。二の句ハ桜花と合せて思ひよせ玉ふ。浦ハ和歌の浦を云へし。けしきを波の縁なり。

新續古今集

春哥上

水無瀬殿にて諸哥を合せられける時に春哥を　　家隆卿

橋姫のあさけの袖やまがふらん霞もしろき宇治の河なみ

其の歌ハ霞もしろく見えけれハ橋姫の朝妻の袖やまがふらんと見る程に霞ふかき河波をいふにや。二ハ波も白き物なる故にいつもあさける景色を霞の外に白く見えけれハ霞にて中すがふと云ふ詞にかし。

吉野山霞　　権中納言雅経

春霞たちかへり吹くる風にみよしぬれぬ吉野山

国立公文書館
National Archives of Japan

[illegible]百[illegible]夢合小雲雀　後京極摂政

かゝる恋のすゑもみつるまゝ来ぬ[illegible]ふ[illegible]百[illegible]月[illegible]ぞ[illegible]

[illegible]自[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]出ぬ[illegible]ば[illegible]

[illegible]ぞ[illegible]ふ[illegible]ぞ[illegible]

[illegible]も[illegible]ば[illegible]の[illegible]

後小松院[illegible]人[illegible]

つゆ[illegible]ふ[illegible]孫[illegible]　雅孫々

[illegible]義[illegible]孫[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]ど[illegible]人[illegible]

いよとゝる[illegible]ふ[illegible]

[illegible]ぞ[illegible]ふ[illegible]の[illegible]

乃なぞゆふ[illegible]の[illegible]を[illegible]

[illegible]

芳歌

百[illegible]月[illegible]　順徳院御製

[illegible]ぬ[illegible]

[illegible]ぬ[illegible]

[illegible]

○[illegible]

ゆゑに。かくよそをせあへるは。清田の社のこゝ[illegible]
ふしぬ。ぬさの多くべし。百ぬさ十二ぬさ。かくしてや社やあらん
大あらきのこゝろ。社の名めもなくとゝのあり。二の
ゐなりもあんりそしらるゝ。ぬさ。しかるべきなり。
あるもしを。ぬさを後ぬさ。後ぬさ。後ぬさ。
今をまぬさやゝみなんと。こゝに入られたるもどころなし。

新玉津島社よりもゝ百そ歌ども中に

雜部

ぬるかづらきの山の紅葉のしづくもなほふるぬれぬるかづらきの山の紅葉のしづくもなほふる

ゆゑの若ゆゑ。ゆゑづくしきの山はるれ。ゆゑの若ゆゑ。ゆゑ

らくは。初句。紅葉。紅葉。紅葉。紅葉。紅葉。紅葉。紅葉。紅葉。

後ぬさ。後ぬさ。後ぬさ。後ぬさ。後ぬさ。後ぬさ。後ぬさ。後ぬさ。

まつりの日。社。清田。

[illegible]ぬさは。ぬさ。ぬさの社。ぬさ。ぬさ。ぬさ。ぬさ。ぬさ。ぬさ。

初百。百。百。百。百。百。百。百。百。百。百。百。百。百。百。

ぬさ。ぬさの。ぬさ。ぬさ。ぬさ。ぬさ。ぬさ。ぬさ。ぬさ。ぬさ。

秋歌下

新玉津島社よりもゝ百そ歌ども中に山路の秋

雅経

此歌ハおもふに秋の末もうすき雲ハ下にすぎて　佐保の山風
秋の雲ハ晴やらぬまゝにてさて　佐保山の梢の色も
うすくみゆる也。吹はらふべき風のすさまじ。　色もうす雲
といふもうすく見ゆるうす雲といひてうちあるをつゞめし一ツに
と聞え。　立へだてたるもかの梢の色見ゆることをいひて
ただめにうすき雲といひし。誠に雲ハ立ちさかるに見えてかすかに
きなり。下ハ凶にもいひもらざるべし。

冬二首

初冬嵐　　雅経

をばしまも時雨にそめぬ山のあらし冬やきぬらん
後小松院して人の歌をさぐりて冬十首ある中の
たつた川つらなる小社落葉
生田川冬ハ秋ぞへだてしてもみぢばおくるゝあまの下風
下句よそにみきあハた社の下風ハもみぢばおくるゝんハと聞ゆ
河辺まくらだぬま(?)のうち海ぞしやぶれバ也。

恋哥二

洞院摂政家百首歌に不遇恋

さて今宵一社のきみのしのぬき衣ほさでいくあまのそでしぼの嵐
ぬきの秋の井のさゝ〻しの神よりもあづさこゝ一あづさひぐら
まるまゝなる。下句八雲毎ふえあづさむなしくてあくるとて。

哀歌三

建保二年七月廿九合歌中哀

俊朱つ女

命やとあづの大井のさゝ波そゝのれき美もをしらぬ身を
ぬ子の命やとゆぞは嵐のちぐれをはらよしくばをしら

順徳院御製

なくふ。命やちぐのそらてふぬ子の花上白をゝめさせもあく
つ。はつれき美とは。ゝるふく美れぬぐくあくるをしら。
美も八美ようへてしものそゝ。一その沖をハ雲ようへてしものそゝ。命
八雲れあづ嵐れぬ美一ぬの美ふゝとる惜ゝ〻ぬ
美ぬなる和ちゝ。ちぐの大井八雲を抜しゝ雲美。

哀歌四

光明寺もる入を哀抜改家百ゝ分ふ美哀

都住つと

ぶひ川秋ゝしゝ美れ入ぬ雲ぬ月ふゝめし

[illegible]

つきぬれるまに月のうてしがあるをへて氷の
はるのこゝろハいかゝ[illegible]ん人のゝ[illegible]ゝ今ゝあまた
[illegible]ゝ　ゆくゝ思ひ川とハたゞ名のみにて
つ[illegible]ゝ　[illegible]ハ新の[illegible]ハ[illegible]
月の光しきよれハ新[illegible]ゝ　[illegible]
正治百首歌

[illegible]門院大[illegible]

[illegible]ぬ夏の梅ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]ゝ　一そのこゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ

建仁元年七月三日合歌　　後鳥羽院御製

波きしてゆきかへるなごりなるらんとまぬ山の秋ぞうらもしき

海ならぬ波の分れとなるを山の陰よりたちて海とへの面に

三の白ゆきぐしに波のうれ海くもるまでもく　秋をいくのこころの

秋を　海を源のふるさとをまよふのうみをきとをきつゝふ

むこくとなるを一ツ山の秋をあるゆくそこにこゝにてうる

後京極摂政歌合に三の橋を　ひさくあつ

人くをぐしれ橋ゆ一ちつ一ツ未をふこうしく秋の面ひ海

三三の白八絶えく又あさぬ雪ふかゆ一ちるこゝ　四の白八絶雪初海

のゆきをふるましくくえふ一ツあきぐばくをれ一ツ　代に橋を

いまてうの通路れよりをなのまぐ　牡孫の親あるまほーきく

ふをぐしの橋八絶ふよせ　ゆきの白又人くも秋とゝれ八

ゆきてうあれぐ三四の白ふこのをあるぬれ一ツ初白

うき年ふをぐあるましぐ八絶ゆく又をぐれも孫あう

まを

千載集

春哥上　　後宋つ

十七三のゆ年ふ花

みりゆ一ツ春の花のゆきりをりつゝればゆしれまう孫ゆ年風ぐ吹

夏部

按政治の大体は中古時の事合ふ部公

後宋つ

[illegible]

秋部上

百[illegible]なる時秋の部　後宋つ

[illegible]

秋部下

保延の[illegible]百[illegible]の[illegible]

後宋つ出

[illegible]

赤[illegible]二条院位[illegible]殿の殿の[illegible]合ふ関係[illegible]

後三位教改

部[illegible]

初句[illegible]

[illegible]

○天保八年[illegible]秋部下の巻

国立公文書館
National Archives of Japan

拾遺百首哀傷

あさ霧のたちまよふ海の底にあくがれ渡るたましひ

藤原為時

題歌二

歌しらず

くれなゐの袖をぬらすとたれゆゑにたちまよふらん思ひそめてき

藤原為時

打ちのびきてぬるとはなしに人なれもたるゆゑにひまなくて

藤原為時

哀傷

月前哀

藤原佐理

なぎさ漕ぐ月やハ物を思ハせるうこもつゞ浮きもるるみるこぶね

新古今中

藤原佐理卿すまあたりにて月を見て

藤原定家

いづくにか風をもせきもらしみやしら吉野の奥もおぼろ月

なきまろうむとは学のうきをうらみてのがれいるるそ

てくやしみのあく学をうらぶそのがれいるおなるるなり

おもこゝろも花紅葉をたれどうきはうれがくしい
づくおもひのれすいてうきことのちうこんをみやさて
風をも月をおもふよりそうきあるがよりはかの
あくさうきをうづる和歌あきはいとはかなし
中を思ひおもひやるこのちをばいのうきを恨て
いづくゝおもひのをきをもとめたる

述懐百首歌よみ侍りける時

俊成

世中よをうきたゝ花思ひいる山のおくまとあくがれぬる

又前のやうに侍院宮ありやうたのるうたのふきこ

ゝ人事あるそ厳上のぞうれく侍る事とも
なれそ又乃そうれやうひのはらちごろ侍ふ
侍事ゝ者たゝ山べきよりしたゝ雑言ものを詠ふ
中侍りしうふそくの侍りし

あしし中ゝ乃雲侍まひしし家をそ歌をさへや侍るつべき
初二句をそ文なるの厳とうれきるる事ゝ侍る
をあゝ者ゝづそしもそ侍るハのそあるふことを
も。こゝそしそもそ侍やそれそれは二の句をそうら
みをそふおすそいふおぞやや世又ゝづうれるを思よ
をとうんそれ雲侍といふ厳とゝ乃ゝ侍るを。十句ハそ後

乃至さいぜんくされもかやうにかきてくれたる
ものゝ中にそれぞれ
くさ〳〵のものゝよしをかき

寛政三辛酉四月十三日持参書をへぬ

書肆

名古屋本町通七丁目

永樂屋東四郎藏板

本文古事記ハ三巻ニシテ上巻ハ天地ノ初発ヨリ鵜葺草葺不合命ノ御代ニ至ルマヲ所謂神代ノ事ヲ記シ中巻ハ神武天皇ヨリ推古天皇ニ至リテ止ル以上神代及二十四代ノ御記ナリトモ下巻ハ仁徳天皇ヨリ四十三代元明天皇ノ和銅五年太朝臣安万侶ノ奉ル天武天皇ノ御口授ノ詞ヲ誦習ノ者ノ常ニ誦熟タル旧辞ヲ撰録シ先タマヒシ代ニ稗田ノ阿礼ト云ヒシ人ノカキ先ヒシ

支那にて知識高く志古人の未曾有の学問を凝し本居先生深く
工夫成就し三十餘年にして古事記注解を著述ふ普く古記に
ふべき体裁同じかるべきを考へたるは古事記の注解と
傳とを彼の漢書なる易詩書春秋等に傳へたまへる意也
ら辨じ載て普通の解と体裁同じかるべきを考へたるは
ふ上代大簡なる本文を細に後世に傳へたまへる意也
○六国史の首ふ日本書紀は聖徳太子の撰たまへる意也
舊事紀は其二書と古事記とを対比して此書一巻を論辨
たる支此書一巻ふ論辨あり先巻首古記典等は総論にて諸
いとをけるやうふ日本紀ふ先巻首古記典等は総論にて諸
国ふ国史を置て言事を記さしむとあるを朝廷ふて
れより史ふ既く史ふ古記を摭古天皇二十八年聖徳太
さきふ日本紀修撰の頃ふ古記あきをけむとあるを知れ
一書と以ふ多しさて摭古天皇二十八年聖徳太
子蘇我の馬子の大臣や大連伴造国造
百八十部并公民等本記天武録天皇十年ふ是今世ふ舊事紀十巻
ものなるべしふ川島皇子舊事紀十巻

二人ふおかせて帝紀及上古諸事を記定しめ給ふと
日本紀にいはれとも世ふ伝へらるに
元明天皇和銅四年九月十八日太朝臣安万侶ふ詔おほせて
せて古事記を撰録し
終て奏進と本書の序文ふ見や日本紀ハ同天皇れ養老
四年ふ成より本紀に記さたれど此記より八八
年ふくれさてさて此古事記ハ字の文とかざらびもそ
ら古語とひ孫とし古の實れおそさを先しと勤た
るふをのおろより漢學さらりに行くれて何事かる
たのさおのをうらやおのみ日本紀ハ漢の國史ふ似
さきバそれと悦び此記のずるやるとハ正しき
国史のさまるらぞとてらぞるる世の人彼をのミれ
ふを用ひ此記ハ名とだふちらぬも多し（以上取詮又曰）
事紀の偽書たるよりを辨ぜられそ大略ふ今
世ふある日事本紀十巻聖徳太子の撰ふ真の紀ふ
く非ず後の人の偽輯のさるものふして古事記と日本紀を
取合せ又往々古語拾遺をしも取り但し三の巻の饒
速日命の天より降り坐時の事と五れ巻尾張連物部連

の世次と十の巻國造の本紀い他か古書ありて取るる物ぬるべし。以上版錯ふもらの論あるもば二書いとられ皇子皇人舎

しなり○或人古事記成て後八年を経同天皇舎人

ふ日本紀と撰じしめ給ひしは此記あやまりある故

との疑問ふ答られとる論弁ち本書ふ委し○古事記は

異本ある支世上流布の本二部ありて一を寛永板にて

一を伊勢度會の延佳

文字誤脱訓もすべて訓し直されにもど已がきり

神主の鼇頭本誤脱と訂し中々の意りの

しらとも加へ字も私に改りと見えて得られるが一部又延佳神

この外ふ先生らくして書入らとふと其

も異本どもを比校して写し

たる本又京柳井敬義の藏書これを寛永板ふ大らさ同れ

じ又てが尾張名古屋大須真福寺の本誤脱ハ殊ふ

あれど奇き異本しこもを用捨し訂定し本文に立ち

らも太字ふて書し訓ハ更ふ古書と證として歳密ふ考鑒

しこやく傍假字を施さきたれでよむ人此訓と諸習の

文字をよく見覚えさて傳ハよむべきく○此傳著述の

年紀ハ伴の信友主の鈴屋翁暑年譜に明和元年三十五歳

にて古事記傳の稿を始ふ年のとし天明六年五十七歳

に時上の巻の傳既ふ成しづらち彫えさとかきろひ

寛政の始刻成しけりふのち七年寛政四年六十三歳中巻

に傳成ると共に年と同十年六十九歳ふして下巻に傳成辛

後文政五年に至て全部刻成

此書も古訓を解し古意とさとくもしくつまびらかにあげ

そべていさらのとをとたるハとりふて

つろひて古學の趣まさ後に世の緒れさまでてきま

へおうれたる書かをバ書紀とはじ先とろの古書ハ

さらふといくず又後に景書物語書を見るにもワきま

ふ屋き支おほけをバかへをよみ心得おくべき書ろ

ろよし附巻目録凡例の末ふ子息春庭主記し置れり

一巻

古記典等総論一　書紀の論ひ　舊事紀とふ書の論

記題号の事　諸本又注釈に事　文體の事

假字の事　訓法の事　一巻終

直毘霊

此書ハ道といとそれ論うりと注してが神道の本意と本

文ふ述自注ぜられたる古人未發の明弁にて當時より後

まで諸家ふおいて議論ふ〻ざまとそハ皆取ふもたゝぬ説
ゑにて此書ハしも学者必關記して常ふ口熟後世を教導
ふ〻專要の大章なり。

二巻　安万侯奏上の序文と載てくわしく解る次小系図　二十五丁ゑ　古事記ゟ
三巻　天地の初發の段　一丁　神代七世の段　三十三丁
四巻　おのごろ島の段　一丁　みとのまぐわひの段　十四丁
五巻　大八島成出の段　一丁　諸神等生坐の段　三十丁
伊邪那美命御石隱の段　五十丁　迦具土神被殺の段　六十九丁
六巻　夜見の段　一丁　御身滌の段　三十七丁
七巻　三柱貴御子御事依の段　一丁　須佐之男命御噛いさちの段　十五丁
御宇氣比の段　一九丁　男御子女御子御詔別の段　五十八丁
八巻　須佐之男命御荒備の段　一丁　天石屋戸の段　十七丁
九巻　須佐之男命御被避の段　一丁　心俣とろちの段　一三丁
須賀宮の段　三十八丁　大國主神御祖の段　四十九丁
十巻　稲羽素兎の段　一丁　手間山の段　十四丁　根堅洲國の段　四丁
十一巻　八千矛神御妻問の段　一丁　うきゆひの段　二十八丁
大國主神御未神等の段　五十六丁

十二巻　少名毘古那神の段　一丁　幸魂奇魂の段　十六丁
十三巻　大年神羽山戸神御子等の段　二十八丁
十四巻　國平御議の段　一丁　天若日子の段　十五丁
大國主神國避の段
十五巻　御孫命御天降の段　一丁　日向宮御鎮座の段　六十五丁
十六巻　猿女君の段　一丁　猿田毘古神阿射加の段　八丁
木花佐久夜毘賣御子産の段　三十七丁
十七巻　大山津見神詔の段　一丁　綿津見宮の段　九丁
御幸易の段　一丁　鵜羽産屋の段　六十一丁
火照命奉仕の段　五十三丁
十八巻　鵜草葺不合命御子等の段　八十九丁
十九巻　廿巻　白檮原宮の段　神武
廿一巻　高岡宮の段　綏靖　一丁　浮宛宮の段　安寧　七丁
境岡宮の段　懿德　七丁　掖上宮の段　孝昭　十七丁
秋津島宮の段　孝安　三十四丁　黑田宮の段　孝昊　三十八丁
廿二巻　境原宮の段　孝元　一丁　伊邪河宮の段　開化　四十一丁
廿三巻　水垣宮の段　崇神
廿四巻　廿五巻　玉垣宮の段　垂仁
廿六巻　廿七巻　廿八巻　日代宮の段　景行

廿九卷　日代宮の段　一丁　志賀宮の段　成務　四十七丁
三十卷　三十一卷　訶志比宮の段　仲哀
三十二卷　三十三卷　明の宮の段　應神
三十五卷　三十六卷　三十七卷　高津宮の段　仁德
三十八卷　若櫻宮の段　履中　一丁　多治比宮の段　反正　三十七丁
三十九卷　遠飛鳥宮の段　允恭
四十卷　穴穗宮の段　安康
四十一卷　四十二卷　朝倉宮の段　雄略
四十三卷　甕栗宮の段　清寧　一丁　近飛鳥宮の段　顯宗　四十八丁
廣高宮の段　仁賢　七十二丁　列木宮の段　武烈　七十六丁
四十四卷　玉穗宮の段　繼體　一丁　金著宮の段　安閑　二十三丁
檜垣宮の段　宣化　廿六丁　師木島宮の段　欽明　三十四丁
他田宮の段　敏達　四十八丁　池邊宮の段　用明　六十丁
倉椅宮の段　崇峻　六十八丁　小治田宮の段　推古　七十丁

板元　尾州名古屋本町通七丁目　永樂屋東四郎

萬葉集畧解

全三十二卷

此萬葉集は上古雄畧天皇の御代あるより後は寧樂朝にいたる迄上天子より下庶人に至まで長哥短哥雜体併とれや種々の哥を廣く集たる所謂古体の哥集の大成なるもの也○萬葉考に萬葉集の數の多かる也葉を詞にて哥といふや荷田の大人曰東人が世の意れる所依つれどもしきりに字を借しのこせる葉を哥といふよせぞが何を集るやも解えじ○集たる人は是も同書に高野の御時天孝謙皇橘諸兄の大臣撰たまへるや世継物語に見へされや高野の御時より前聖武天皇の御代なりんとおもふ事ある也諸兄の大臣の撰ぞちふそ古へ人いひつたへしふく實ふさアけらし普通の說ふそ孝謙天皇の勅を奉て撰たまへるさまなど諸兄公薨逝の後に哥ふ諸兄公ふあらびやをいひ種々先あアとも云ひ又諸兄家持卿の增加さを或を家持卿の種々先達の說ふれど加茂翁も真の萬葉集といふを今のる二

十卷の内ふ六卷はうり其餘も万葉といふもの引もいうらざるよしをいひて上の如く諸兄公の撰ふ治定せらるゝ○惣哥員の事八雲御抄に四千三百十五首袋草紙ふ四千三百十首や○加茂翁新に改めらるゝ○今のごとし今の十三の巻と三の巻と一の巻二の巻次ぎに巻五の巻ハ今の十四の巻ハ今の五の巻ハ今の六の巻ハ今の十一の巻と十二の巻と大の巻の家の集今の七の巻と結びたる巻十の巻ハ哥も聊か古く集ふ巻ハ上憶良の他とかゝり此二巻と上集ふかたとふるぬる宮に大宮に振古時代ハ哥四の巻五の巻ハ今の十の巻と十一の巻と十二の巻と十三の巻と十四の巻と十五の巻と十六の巻と十七の巻と十八の巻と十九の巻と廿の巻と廿一の巻と廿二の巻と廿三の巻と廿四の巻と廿五の巻と廿六の巻と廿七の巻と廿八の巻と廿九の巻と卅の巻と卅一の巻と卅二の巻と卅三の巻と卅四の巻と卅五の巻と卅六の巻と卅七の巻と卅八の巻と卅九の巻と四十の巻と四十一の巻と四十二の巻と四十三の巻と四十四の巻と四十五の巻と四十六の巻と四十七の巻と四十八の巻と四十九の巻と五十の巻と五十一の巻と五十二の巻と五十三の巻と五十四の巻と五十五の巻と五十六の巻と五十七の巻と五十八の巻と五十九の巻と六十の巻と六十一の巻と六十二の巻と六十三の巻と六十四の巻と六十五の巻と六十六の巻と六十七の巻と六十八の巻と六十九の巻と七十の巻と七十一の巻と七十二の巻と七十三の巻と七十四の巻と七十五の巻と七十六の巻と七十七の巻と七十八の巻と七十九の巻と八十の巻と八十一の巻と八十二の巻と八十三の巻と八十四の巻と八十五の巻と八十六の巻と八十七の巻と八十八の巻と八十九の巻と九十の巻と九十一の巻と九十二の巻と九十三の巻と九十四の巻と九十五の巻と九十六の巻と九十七の巻と九十八の巻と九十九の巻と百の巻と百一の巻と百二の巻と百三の巻と百四の巻と百五の巻と百六の巻と百七の巻と百八の巻と百九の巻と百十の巻と百十一の巻と百十二の巻と百十三の巻と百十四の巻と百十五の巻と百十六の巻と百十七の巻と百十八の巻と百十九の巻と百廿の巻と百廿一の巻と百廿二の巻と百廿三の巻と百廿四の巻と百廿五の巻と百廿六の巻と百廿七の巻と百廿八の巻と百廿九の巻と百卅の巻と百卅一の巻と百卅二の巻と百卅三の巻と百卅四の巻と百卅五の巻と百卅六の巻と百卅七の巻と百卅八の巻と百卅九の巻と百四十の巻と百四十一の巻と百四十二の巻と百四十三の巻と百四十四の巻と百四十五の巻と百四十六の巻と百四十七の巻と百四十八の巻と百四十九の巻と百五十の巻と百五十一の巻と百五十二の巻と百五十三の巻と百五十四の巻と百五十五の巻と百五十六の巻と百五十七の巻と百五十八の巻と百五十九の巻と百六十の巻と百六十一の巻と百六十二の巻と百六十三の巻と百六十四の巻と百六十五の巻と百六十六の巻と百六十七の巻と百六十八の巻と百六十九の巻と百七十の巻と百七十一の巻と百七十二の巻と百七十三の巻と百七十四の巻と百七十五の巻と百七十六の巻と百七十七の巻と百七十八の巻と百七十九の巻と百八十の巻と百八十一の巻と百八十二の巻と百八十三の巻と百八十四の巻と百八十五の巻と百八十六の巻と百八十七の巻と百八十八の巻と百八十九の巻と百九十の巻と百九十一の巻と百九十二の巻と百九十三の巻と百九十四の巻と百九十五の巻と百九十六の巻と百九十七の巻と百九十八の巻と百九十九の巻と二百の巻と二百一の巻と二百二の巻と二百三の巻と二百四の巻と二百五の巻と二百六の巻と二百七の巻と二百八の巻と二百九の巻と二百十の巻と二百十一の巻と二百十二の巻と二百十三の巻と二百十四の巻と二百十五の巻と二百十六の巻と二百十七の巻と二百十八の巻と二百十九の巻と二百廿の巻と二百廿一の巻と二百廿二の巻と二百廿三の巻と二百廿四の巻と二百廿五の巻と二百廿六の巻と二百廿七の巻と二百廿八の巻と二百廿九の巻と二百卅の巻と二百卅一の巻と二百卅二の巻と二百卅三の巻と二百卅四の巻と二百卅五の巻と二百卅六の巻と二百卅七の巻と二百卅八の巻と二百卅九の巻と三百の巻と三百一の巻と三百二の巻と三百三の巻と三百四の巻と三百五の巻と三百六の巻と三百七の巻と三百八の巻と三百九の巻と三百十の巻と三百十一の巻と三百十二の巻と三百十三の巻と三百十四の巻と三百十五の巻と三百十六の巻と三百十七の巻と三百十八の巻と三百十九の巻と三百廿の巻と三百廿一の巻と三百廿二の巻と三百廿三の巻と三百廿四の巻と三百廿五の巻と三百廿六の巻と三百廿七の巻と三百廿八の巻と三百廿九の巻と三百卅の巻と三百卅一の巻と三百卅二の巻と三百卅三の巻と三百卅四の巻と三百卅五の巻と三百卅六の巻と三百卅七の巻と三百卅八の巻と三百卅九の巻と四百の巻と四百一の巻と四百二の巻と四百三の巻と四百四の巻と四百五の巻と四百六の巻と四百七の巻と四百八の巻と四百九の巻と四百十の巻と四百十一の巻と四百十二の巻と四百十三の巻と四百十四の巻と四百十五の巻と四百十六の巻と四百十七の巻と四百十八の巻と四百十九の巻と四百廿の巻と四百廿一の巻と四百廿二の巻と四百廿三の巻と四百廿四の巻と四百廿五の巻と四百廿六の巻と四百廿七の巻と四百廿八の巻と四百廿九の巻と四百卅の巻と四百卅一の巻と四百卅二の巻と四百卅三の巻と四百卅四の巻と四百卅五の巻と四百卅六の巻と四百卅七の巻と四百卅八の巻と四百卅九の巻と五百の巻と五百一の巻と五百二の巻と五百三の巻と五百四の巻と五百五の巻と五百六の巻と五百七の巻と五百八の巻と五百九の巻と五百十の巻と五百十一の巻と五百十二の巻と五百十三の巻と五百十四の巻と五百十五の巻と五百十六の巻と五百十七の巻と五百十八の巻と五百十九の巻と五百廿の巻と五百廿一の巻と五百廿二の巻と五百廿三の巻と五百廿四の巻と五百廿五の巻と五百廿六の巻と五百廿七の巻と五百廿八の巻と五百廿九の巻と五百卅の巻と五百卅一の巻と五百卅二の巻と五百卅三の巻と五百卅四の巻と五百卅五の巻と五百卅六の巻と五百卅七の巻と五百卅八の巻と五百卅九の巻と六百の巻と六百一の巻と六百二の巻と六百三の巻と六百四の巻と六百五の巻と六百六の巻と六百七の巻と六百八の巻と六百九の巻と六百十の巻と六百十一の巻と六百十二の巻と六百十三の巻と六百十四の巻と六百十五の巻と六百十六の巻と六百十七の巻と六百十八の巻と六百十九の巻と六百廿の巻と六百廿一の巻と六百廿二の巻と六百廿三の巻と六百廿四の巻と六百廿五の巻と六百廿六の巻と六百廿七の巻と六百廿八の巻と六百廿九の巻と六百卅の巻と六百卅一の巻と六百卅二の巻と六百卅三の巻と六百卅四の巻と六百卅五の巻と六百卅六の巻と六百卅七の巻と六百卅八の巻と六百卅九の巻と七百の巻と七百一の巻と七百二の巻と七百三の巻と七百四の巻と七百五の巻と七百六の巻と七百七の巻と七百八の巻と七百九の巻と七百十の巻と七百十一の巻と七百十二の巻と七百十三の巻と七百十四の巻と七百十五の巻と七百十六の巻と七百十七の巻と七百十八の巻と七百十九の巻と七百廿の巻と七百廿一の巻と七百廿二の巻と七百廿三の巻と七百廿四の巻と七百廿五の巻と七百廿六の巻と七百廿七の巻と七百廿八の巻と七百廿九の巻と七百卅の巻と七百卅一の巻と七百卅二の巻と七百卅三の巻と七百卅四の巻と七百卅五の巻と七百卅六の巻と七百卅七の巻と七百卅八の巻と七百卅九の巻と八百の巻と八百一の巻と八百二の巻と八百三の巻と八百四の巻と八百五の巻と八百六の巻と八百七の巻と八百八の巻と八百九の巻と八百十の巻と八百十一の巻と八百十二の巻と八百十三の巻と八百十四の巻と八百十五の巻と八百十六の巻と八百十七の巻と八百十八の巻と八百十九の巻と八百廿の巻と八百廿一の巻と八百廿二の巻と八百廿三の巻と八百廿四の巻と八百廿五の巻と八百廿六の巻と八百廿七の巻と八百廿八の巻と八百廿九の巻と八百卅の巻と八百卅一の巻と八百卅二の巻と八百卅三の巻と八百卅四の巻と八百卅五の巻と八百卅六の巻と八百卅七の巻と八百卅八の巻と八百卅九の巻と九百の巻と九百一の巻と九百二の巻と九百三の巻と九百四の巻と九百五の巻と九百六の巻と九百七の巻と九百八の巻と九百九の巻と九百十の巻と九百十一の巻と九百十二の巻と九百十三の巻と九百十四の巻と九百十五の巻と九百十六の巻と九百十七の巻と九百十八の巻と九百十九の巻と九百廿の巻と九百廿一の巻と九百廿二の巻と九百廿三の巻と九百廿四の巻と九百廿五の巻と九百廿六の巻と九百廿七の巻と九百廿八の巻と九百廿九の巻と九百卅の巻と九百卅一の巻と九百卅二の巻と九百卅三の巻と九百卅四の巻と九百卅五の巻と九百卅六の巻と九百卅七の巻と九百卅八の巻と九百卅九の巻と十百の巻と十百一の巻と十百二の巻と十百三の巻と十百四の巻と十百五の巻と十百六の巻と十百七の巻と十百八の巻と十百九の巻と十百十の巻と十百十一の巻と十百十二の巻と十百十三の巻と十百十四の巻と十百十五の巻と十百十六の巻と十百十七の巻と十百十八の巻と十百十九の巻と十百廿の巻と十百廿一の巻と十百廿二の巻と十百廿三の巻と十百廿四の巻と十百廿五の巻と十百廿六の巻と十百廿七の巻と十百廿八の巻と十百廿九の巻と十百卅の巻と十百卅一の巻と十百卅二の巻と十百卅三の巻と十百卅四の巻と十百卅五の巻と十百卅六の巻と十百卅七の巻と十百卅八の巻と十百卅九の巻と百の巻と百一の巻と百二の巻と百三の巻と百四の巻と百五の巻と百六の巻と百七の巻と百八の巻と百九の巻と百十の巻と百十一の巻と百十二の巻と百十三の巻と百十四の巻と百十五の巻と百十六の巻と百十七の巻と百十八の巻と百十九の巻と百廿の巻と百廿一の巻と百廿二の巻と百廿三の巻と百廿四の巻と百廿五の巻と百廿六の巻と百廿七の巻と百廿八の巻と百廿九の巻と百卅の巻と百卅一の巻と百卅二の巻と百卅三の巻と百卅四の巻と百卅五の巻と百卅六の巻と百卅七の巻と百卅八の巻と百卅九の巻と百四十の巻と百四十一の巻と百四十二の巻と百四十三の巻と百四十四の巻と百四十五の巻と百四十六の巻と百四十七の巻と百四十八の巻と百四十九の巻と百五十の巻と百五十一の巻と百五十二の巻と百五十三の巻と百五十四の巻と百五十五の巻と百五十六の巻と百五十七の巻と百五十八の巻と百五十九の巻と百六十の巻と百六十一の巻と百六十二の巻と百六十三の巻と百六十四の巻と百六十五の巻と百六十六の巻と百六十七の巻と百六十八の巻と百六十九の巻と百七十の巻と百七十一の巻と百七十二の巻と百七十三の巻と百七十四の巻と百七十五の巻と百七十六の巻と百七十七の巻と百七十八の巻と百七十九の巻と百八十の巻と百八十一の巻と百八十二の巻と百八十三の巻と百八十四の巻と百八十五の巻と百八十六の巻と百八十七の巻と百八十八の巻と百八十九の巻と百九十の巻と百九十一の巻と百九十二の巻と百九十三の巻と百九十四の巻と百九十五の巻と百九十六の巻と百九十七の巻と百九十八の巻と百九十九の巻と二百の巻と二百一の巻と二百二の巻と二百三の巻と二百四の巻と二百五の巻と二百六の巻と二百七の巻と二百八の巻と二百九の巻と二百十の巻と二百十一の巻と二百十二の巻と二百十三の巻と二百十四の巻と二百十五の巻と二百十六の巻と二百十七の巻と二百十八の巻と二百十九の巻と二百廿の巻と二百廿一の巻と二百廿二の巻と二百廿三の巻と二百廿四の巻と二百廿五の巻と二百廿六の巻と二百廿七の巻と二百廿八の巻と二百廿九の巻と二百卅の巻と二百卅一の巻と二百卅二の巻と二百卅三の巻と二百卅四の巻と二百卅五の巻と二百卅六の巻と二百卅七の巻と二百卅八の巻と二百卅九の巻と三百の巻と三百一の巻と三百二の巻と三百三の巻と三百四の巻と三百五の巻と三百六の巻と三百七の巻と三百八の巻と三百九の巻と三百十の巻と三百十一の巻と三百十二の巻と三百十三の巻と三百十四の巻と三百十五の巻と三百十六の巻と三百十七の巻と三百十八の巻と三百十九の巻と三百廿の巻と三百廿一の巻と三百廿二の巻と三百廿三の巻と三百廿四の巻と三百廿五の巻と三百廿六の巻と三百廿七の巻と三百廿八の巻と三百廿九の巻と三百卅の巻と三百卅一の巻と三百卅二の巻と三百卅三の巻と三百卅四の巻と三百卅五の巻と三百卅六の巻と三百卅七の巻と三百卅八の巻と三百卅九の巻と四百の巻と四百一の巻と四百二の巻と四百三の巻と四百四の巻と四百五の巻と四百六の巻と四百七の巻と四百八の巻と四百九の巻と四百十の巻と四百十一の巻と四百十二の巻と四百十三の巻と四百十四の巻と四百十五の巻と四百十六の巻と四百十七の巻と四百十八の巻と四百十九の巻と四百廿の巻と四百廿一の巻と四百廿二の巻と四百廿三の巻と四百廿四の巻と四百廿五の巻と四百廿六の巻と四百廿七の巻と四百廿八の巻と四百廿九の巻と四百卅の巻と四百卅一の巻と四百卅二の巻と四百卅三の巻と四百卅四の巻と四百卅五の巻と四百卅六の巻と四百卅七の巻と四百卅八の巻と四百卅九の巻と五百の巻と五百一の巻と五百二の巻と五百三の巻と五百四の巻と五百五の巻と五百六の巻と五百七の巻と五百八の巻と五百九の巻と五百十の巻と五百十一の巻と五百十二の巻と五百十三の巻と五百十四の巻と五百十五の巻と五百十六の巻と五百十七の巻と五百十八の巻と五百十九の巻と五百廿の巻と五百廿一の巻と五百廿二の巻と五百廿三の巻と五百廿四の巻と五百廿五の巻と五百廿六の巻と五百廿七の巻と五百廿八の巻と五百廿九の巻と五百卅の巻と五百卅一の巻と五百卅二の巻と五百卅三の巻と五百卅四の巻と五百卅五の巻と五百卅六の巻と五百卅七の巻と五百卅八の巻と五百卅九の巻と六百の巻と六百一の巻と六百二の巻と六百三の巻と六百四の巻と六百五の巻と六百六の巻と六百七の巻と六百八の巻と六百九の巻と六百十の巻と六百十一の巻と六百十二の巻と六百十三の巻と六百十四の巻と六百十五の巻と六百十六の巻と六百十七の巻と六百十八の巻と六百十九の巻と六百廿の巻と六百廿一の巻と六百廿二の巻と六百廿三の巻と六百廿四の巻と六百廿五の巻と六百廿六の巻と六百廿七の巻と六百廿八の巻と六百廿九の巻と六百卅の巻と六百卅一の巻と六百卅二の巻と六百卅三の巻と六百卅四の巻と六百卅五の巻と六百卅六の巻と六百卅七の巻と六百卅八の巻と六百卅九の巻と七百の巻と七百一の巻と七百二の巻と七百三の巻と七百四の巻と七百五の巻と七百六の巻と七百七の巻と七百八の巻と七百九の巻と七百十の巻と七百十一の巻と七百十二の巻と七百十三の巻と七百十四の巻と七百十五の巻と七百十六の巻と七百十七の巻と七百十八の巻と七百十九の巻と七百廿の巻と七百廿一の巻と七百廿二の巻と七百廿三の巻と七百廿四の巻と七百廿五の巻と七百廿六の巻と七百廿七の巻と七百廿八の巻と七百廿九の巻と七百卅の巻と七百卅一の巻と七百卅二の巻と七百卅三の巻と七百卅四の巻と七百卅五の巻と七百卅六の巻と七百卅七の巻と七百卅八の巻と七百卅九の巻と八百の巻と八百一の巻と八百二の巻と八百三の巻と八百四の巻と八百五の巻と八百六の巻と八百七の巻と八百八の巻と八百九の巻と八百十の巻と八百十一の巻と八百十二の巻と八百十三の巻と八百十四の巻と八百十五の巻と八百十六の巻と八百十七の巻と八百十八の巻と八百十九の巻と八百廿の巻と八百廿一の巻と八百廿二の巻と八百廿三の巻と八百廿四の巻と八百廿五の巻と八百廿六の巻と八百廿七の巻と八百廿八の巻と八百廿九の巻と八百卅の巻と八百卅一の巻と八百卅二の巻と八百卅三の巻と八百卅四の巻と八百卅五の巻と八百卅六の巻と八百卅七の巻と八百卅八の巻と八百卅九の巻と九百の巻と九百一の巻と九百二の巻と九百三の巻と九百四の巻と九百五の巻と九百六の巻と九百七の巻と九百八の巻と九百九の巻と九百十の巻と九百十一の巻と九百十二の巻と九百十三の巻と九百十四の巻と九百十五の巻と九百十六の巻と九百十七の巻と九百十八の巻と九百十九の巻と九百廿の巻と九百廿一の巻と九百廿二の巻と九百廿三の巻と九百廿四の巻と九百廿五の巻と九百廿六の巻と九百廿七の巻と九百廿八の巻と九百廿九の巻と九百卅の巻と九百卅一の巻と九百卅二の巻と九百卅三の巻と九百卅四の巻と九百卅五の巻と九百卅六の巻と九百卅七の巻と九百卅八の巻と九百卅九の巻と十百の巻と十百一の巻と十百二の巻と十百三の巻と十百四の巻と十百五の巻と十百六の巻と十百七の巻と十百八の巻と十百九の巻と十百十の巻と十百十一の巻と十百十二の巻と十百十三の巻と十百十四の巻と十百十五の巻と十百十六の巻と十百十七の巻と十百十八の巻と十百十九の巻と十百廿の巻と十百廿一の巻と十百廿二の巻と十百廿三の巻と十百廿四の巻と十百廿五の巻と十百廿六の巻と十百廿七の巻と十百廿八の巻と十百廿九の巻と十百卅の巻と十百卅一の巻と十百卅二の巻と十百卅三の巻と十百卅四の巻と十百卅五の巻と十百卅六の巻と十百卅七の巻と十百卅八の巻と十百卅九の巻と百の巻と百一の巻と百二の巻と百三の巻と百四の巻と百五の巻と百六の巻と百七の巻と百八の巻と百九の巻と百十の巻と百十一の巻と百十二の巻と百十三の巻と百十四の巻と百十五の巻と百十六の巻と百十七の巻と百十八の巻と百十九の巻と百廿の巻と百廿一の巻と百廿二の巻と百廿三の巻と百廿四の巻と百廿五の巻と百廿六の巻と百廿七の巻と百廿八の巻と百廿九の巻と百卅の巻と百卅一の巻と百卅二の巻と百卅三の巻と百卅四の巻と百卅五の巻と百卅六の巻と百卅七の巻と百卅八の巻と百卅九の巻と四十の巻と四十一の巻と四十二の巻と四十三の巻と四十四の巻と四十五の巻と四十六の巻と四十七の巻と四十八の巻と四十九の巻と五十の巻と五十一の巻と五十二の巻と五十三の巻と五十四の巻と五十五の巻と五十六の巻と五十七の巻と五十八の巻と五十九の巻と六十の巻と六十一の巻と六十二の巻と六十三の巻と六十四の巻と六十五の巻と六十六の巻と六十七の巻と六十八の巻と六十九の巻と七十の巻と七十一の巻と七十二の巻と七十三の巻と七十四の巻と七十五の巻と七十六の巻と七十七の巻と七十八の巻と七十九の巻と八十の巻と八十一の巻と八十二の巻と八十三の巻と八十四の巻と八十五の巻と八十六の巻と八十七の巻と八十八の巻と八十九の巻と九十の巻と九十一の巻と九十二の巻と九十三の巻と九十四の巻と九十五の巻と九十六の巻と九十七の巻と九十八の巻と九十九の巻と百の巻と百一の巻と百二の巻と百三の巻と百四の巻と百五の巻と百六の巻と百七の巻と百八の巻と百九の巻と百十の巻と百十一の巻と百十二の巻と百十三の巻と百十四の巻と百十五の巻と百十六の巻と百十七の巻と百十八の巻と百十九の巻と百廿の巻と百廿一の巻と百廿二の巻と百廿三の巻と百廿四の巻と百廿五の巻と百廿六の巻と百廿七の巻と百廿八の巻と百廿九の巻と百卅の巻と百卅一の巻と百卅二の巻と百卅三の巻と百卅四の巻と百卅五の巻と百卅六の巻と百卅七の巻と百卅八の巻と百卅九の巻と四百の巻と四百一の巻と四百二の巻と四百三の巻と四百四の巻と四百五の巻と四百六の巻と四百七の巻と四百八の巻と四百九の巻と四百十の巻と四百十一の巻と四百十二の巻と四百十三の巻と四百十四の巻と四百十五の巻と四百十六の巻と四百十七の巻と四百十八の巻と四百十九の巻と四百廿の巻と四百廿一の巻と四百廿二の巻と四百廿三の巻と四百廿四の巻と四百廿五の巻と四百廿六の巻と四百廿七の巻と四百廿八の巻と四百廿九の巻と四百卅の巻と四百卅一の巻と四百卅二の巻と四百卅三の巻と四百卅四の巻と四百卅五の巻と四百卅六の巻と四百卅七の巻と四百卅八の巻と四百卅九の巻と五百の巻と五百一の巻と五百二の巻と五百三の巻と五百四の巻と五百五の巻と五百六の巻と五百七の巻と五百八の巻と五百九の巻と五百十の巻と五百十一の巻と五百十二の巻と五百十三の巻と五百十四の巻と五百十五の巻と五百十六の巻と五百十七の巻と五百十八の巻と五百十九の巻と五百廿の巻と五百廿一の巻と五百廿二の巻と五百廿三の巻と五百廿四の巻と五百廿五の巻と五百廿六の巻と五百廿七の巻と五百廿八の巻と五百廿九の巻と五百卅の巻と五百卅一の巻と五百卅二の巻と五百卅三の巻と五百卅四の巻と五百卅五の巻と五百卅六の巻と五百卅七の巻と五百卅八の巻と五百卅九の巻と六百の巻と六百一の巻と六百二の巻と六百三の巻と六百四の巻と六百五の巻と六百六の巻と六百七の巻と六百八の巻と六百九の巻と六百十の巻と六百十一の巻と六百十二の巻と六百十三の巻と六百十四の巻と六百十五の巻と六百十六の巻と六百十七の巻と六百十八の巻と六百十九の巻と六百廿の巻と六百廿一の巻と六百廿二の巻と六百廿三の巻と六百廿四の巻と六百廿五の巻と六百廿六の巻と六百廿七の巻と六百廿八の巻と六百廿九の巻と六百卅の巻と六百卅一の巻と六百卅二の巻と六百卅三の巻と六百卅四の巻と六百卅五の巻と六百卅六の巻と六百卅七の巻と六百卅八の巻と六百卅九の巻と七百の巻と七百一の巻と七百二の巻と七百三の巻と七百四の巻と七百五の巻と七百六の巻と七百七の巻と七百八の巻と七百九の巻と七百十の巻と七百十一の巻と七百十二の巻と七百十三の巻と七百十四の巻と七百十五の巻と七百十六の巻と七百十七の巻と七百十八の巻と七百十九の巻と七百廿の巻と七百廿一の巻と七百廿二の巻と七百廿三の巻と七百廿四の巻と七百廿五の巻と七百廿六の巻と七百廿七の巻と七百廿八の巻と七百廿九の巻と七百卅の巻と七百卅一の巻と七百卅二の巻と七百卅三の巻と七百卅四の巻と七百卅五の巻と七百卅六の巻と七百卅七の巻と七百卅八の巻と七百卅九の巻と八百の巻と八百一の巻と八百二の巻と八百三の巻と八百四の巻と八百五の巻と八百六の巻と八百七の巻と八百八の巻と八百九の巻と八百十の巻と八百十一の巻と八百十二の巻と八百十三の巻と八百十四の巻と八百十五の巻と八百十六の巻と八百十七の巻と八百十八の巻と八百十九の巻と八百廿の巻と八百廿一の巻と八百廿二の巻と八百廿三の巻と八百廿四の巻と八百廿五の巻と八百廿六の巻と八百廿七の巻と八百廿八の巻と八百廿九の巻と八百卅の巻と八百卅一の巻と八百卅二の巻と八百卅三の巻と八百卅四の巻と八百卅五の巻と八百卅六の巻と八百卅七の巻と八百卅八の巻と八百卅九の巻と九百の巻と九百一の巻と九百二の巻と九百三の巻と九百四の巻と九百五の巻と九百六の巻と九百七の巻と九百八の巻と九百九の巻と九百十の巻と九百十一の巻と九百十二の巻と九百十三の巻と九百十四の巻と九百十五の巻と九百十六の巻と九百十七の巻と九百十八の巻と九百十九の巻と九百廿の巻と九百廿一の巻と九百廿二の巻と九百廿三の巻と九百廿四の巻と九百廿五の巻と九百廿六の巻と九百廿七の巻と九百廿八の巻と九百廿九の巻と九百卅の巻と九百卅一の巻と九百卅二の巻と九百卅三の巻と九百卅四の巻と九百卅五の巻と九百卅六の巻と九百卅七の巻と九百卅八の巻と九百卅九の巻と十百の巻と十百一の巻と十百二の巻と十百三の巻と十百四の巻と十百五の巻と十百六の巻と十百七の巻と十百八の巻と十百九の巻と十百十の巻と十百十一の巻と十百十二の巻と十百十三の巻と十百十四の巻と十百十五の巻と十百十六の巻と十百十七の巻と十百十八の巻と十百十九の巻と十百廿の巻と十百廿一の巻と十百廿二の巻と十百廿三の巻と十百廿四の巻と十百廿五の巻と十百廿六の巻と十百廿七の巻と十百廿八の巻と十百廿九の巻と十百卅の巻と十百卅一の巻と十百卅二の巻と十百卅三の巻と十百卅四の巻と十百卅五の巻と十百卅六の巻と十百卅七の巻と十百卅八の巻と十百卅九の巻と百の巻と百一の巻と百二の巻と百三の巻と百四の巻と百五の巻と百六の巻と百七の巻と百八の巻と百九の巻と百十の巻と百十一の巻と百十二の巻と百十三の巻と百十四の巻と百十五の巻と百十六の巻と百十七の巻と百十八の巻と百十九の巻と百廿の巻と百廿一の巻と百廿二の巻と百廿三の巻と百廿四の巻と百廿五の巻と百廿六の巻と百廿七の巻と百廿八の巻と百廿九の巻と百卅の巻と百卅一の巻と百卅二の巻と百卅三の巻と百卅四の巻と百卅五の巻と百卅六の巻と百卅七の巻と百卅八の巻と百卅九の巻と四百の巻と四百一の巻と四百二の巻と四百三の巻と四百四の巻と四百五の巻と四百六の巻と四百七の巻と四百八の巻と四百九の巻と四百十の巻と四百十一の巻と四百十二の巻と四百十三の巻と四百十四の巻と四百十五の巻と四百十六の巻と四百十七の巻と四百十八の巻と四百十九の巻と四百廿の巻と四百廿一の巻と四百廿二の巻と四百廿三の巻と四百廿四の巻と四百廿五の巻と四百廿六の巻と四百廿七の巻と四百廿八の巻と四百廿九の巻と四百卅の巻と四百卅一の巻と四百卅二の巻と四百卅三の巻と四百卅四の巻と四百卅五の巻と四百卅六の巻と四百卅七の巻と四百卅八の巻と四百卅九の巻と五百の巻と五百一の巻と五百二の巻と五百三の巻と五百四の巻と五百五の巻と五百六の巻と五百七の巻と五百八の巻と五百九の巻と五百十の巻と五百十一の巻と五百十二の巻と五百十三の巻と五百十四の巻と五百十五の巻と五百十六の巻と五百十七の巻と五百十八の巻と五百十九の巻と五百廿の巻と五百廿一の巻と五百廿二の巻と五百廿三の巻と五百廿四の巻と五百廿五の巻と五百廿六の巻と五百廿七の巻と五百廿八の巻と五百廿九の巻と五百卅の巻と五百卅一の巻と五百卅二の巻と五百卅三の巻と五百卅四の巻と五百卅五の巻と五百卅六の巻と五百卅七の巻と五百卅八の巻と五百卅九の巻と六百の巻と六百一の巻と六百二の巻と六百三の巻と六百四の巻と六百五の巻と六百六の巻と六百七の巻と六百八の巻と六百九の巻と六百十の巻と六百十一の巻と六百十二の巻と六百十三の巻と六百十四の巻と六百十五の巻と六百十六の巻と六百十七の巻と六百十八の巻と六百十九の巻と六百廿の巻と六百廿一の巻と六百廿二の巻と六百廿三の巻と六百廿四の巻と六百廿五の巻と六百廿六の巻と六百廿七の巻と六百廿八の巻と六百廿九の巻と六百卅の巻と六百卅一の巻と六百卅二の巻と六百卅三の巻と六百卅四の巻と六百卅五の巻と六百卅六の巻と六百卅七の巻と六百卅八の巻と六百卅九の巻と七百の巻と七百一の巻と七百二の巻と七百三の巻と七百四の巻と七百五の巻と七百六の巻と七百七の巻と七百八の巻と七百九の巻と七百十の巻と七百十一の巻と七百十二の巻と七百十三の巻と七百十四の巻と七百十五の巻と七百十六の巻と七百十七の巻と七百十八の巻と七百十九の巻と七百廿の巻と七百廿一の巻と七百廿二の巻と七百廿三の巻と七百廿四の巻と七百廿五の巻と七百廿六の巻と七百廿七の巻と七百廿八の巻と七百廿九の巻と七百卅の巻と七百卅一の巻と七百卅二の巻と七百卅三の巻と七百卅四の巻と七百卅五の巻と七百卅六の巻と七百卅七の巻と七百卅八の巻と七百卅九の巻と八百の巻と八百一の巻と八百二の巻と八百三の巻と八百四の巻と八百五の巻と八百六の巻と八百七の巻と八百八の巻と八百九の巻と八百十の巻と八百十一の巻と八百十二の巻と八百十三の巻と八百十四の巻と八百十五の巻と八百十六の巻と八百十七の巻と八百十八の巻と八百十九の巻と八百廿の巻と八百廿一の巻と八百廿二の巻と八百廿三の巻と八百廿四の巻と八百廿五の巻と八百廿六の巻と八百廿七の巻と八百廿八の巻と八百廿九の巻と八百卅の巻と八百卅一の巻と八百卅二の巻と八百卅三の巻と八百卅四の巻と八百卅五の巻と八百卅六の巻と八百卅七の巻と八百卅八の巻と八百卅九の巻と九百の巻と九百一の巻と九百二の巻と九百三の巻と九百四の巻と九百五の巻と九百六の巻と九百七の巻と九百八の巻と九百九の巻と九百十の巻と九百十一の巻と九百十二の巻と九百十三の巻と九百十四の巻と九百十五の巻と九百十六の巻と九百十七の巻と九百十八の巻と九百十九の巻と九百廿の巻と九百廿一の巻と九百廿二の巻と九百廿三の巻と九百廿四の巻と九百廿五の巻と九百廿六の巻と九百廿七の巻と九百廿八の巻と九百廿九の巻と九百卅の巻と九百卅一の巻と九百卅二の巻と九百卅三の巻と九百卅四の巻と九百卅五の巻と九百卅六の巻と九百卅七の巻と九百卅八の巻と九百卅九の巻と十百の巻と十百一の巻と十百二の巻と十百三の巻と十百四の巻と十百五の巻と十百六の巻と十百七の巻と十百八の巻と十百九の巻と十百十の巻と十百十一の巻と十百十二の巻と十百十三の巻と十百十四の巻と十百十五の巻と十百十六の巻と十百十七の巻と十百十八の巻と十百十九の巻と十百廿の巻と十百廿一の巻と十百廿二の巻と十百廿三の巻と十百廿四の巻と十百廿五の巻と十百廿六の巻と十百廿七の巻と十百廿八の巻と十百廿九の巻と十百卅の巻と十百卅一の巻と十百卅二の巻と十百卅三の巻と十百卅四の巻と十百卅五の巻と十百卅六の巻と十百卅七の巻と十百卅八の巻と十百卅九の巻と百の巻と百一の巻と百二の巻と百三の巻と百四の巻と百五の巻と百六の巻と百七の巻と百八の巻と百九の巻と百十の巻と百十一の巻と百十二の巻と百十三の巻と百十四の巻と百十五の巻と百十六の巻と百十七の巻と百十八の巻と百十九の巻と百廿の巻と百廿一の巻と百廿二の巻と百廿三の巻と百廿四の巻と百廿五の巻と百廿六の巻と百廿七の巻と百廿八の巻と百廿九の巻と百卅の巻と百卅一の巻と百卅二の巻と百卅三の巻と百卅四の巻と百卅五の巻と百卅六の巻と百卅七の巻と百卅八の巻と百卅九の巻と四百の巻と四百一の巻と四百二の巻と四百三の巻と四百四の巻と四百五の巻と四百六の巻と四百七の巻と四百八の巻と四百九の巻と四百十の巻と四百十一の巻と四百十二の巻と四百十三の巻と四百十四の巻と四百十五の巻と四百十六の巻と四百十七の巻と四百十八の巻と四百十九の巻と四百廿の巻と四百廿一の巻と四百廿二の巻と四百廿三の巻と四百廿四の巻と四百廿五の巻と四百廿六の巻と四百廿七の巻と四百廿八の巻と四百廿九の巻と四百卅の巻と四百卅一の巻と四百卅二の巻と四百卅三の巻と四百卅四の巻と四百卅五の巻と四百卅六の巻と四百卅七の巻と四百卅八の巻と四百卅九の巻と五百の巻と五百一の巻と五百二の巻と五百三の巻と五百四の巻と五百五の巻と五百六の巻と五百七の巻と五百八の巻と五百九の巻と五百十の巻と五百十一の巻と五百十二の巻と五百十三の巻と五百十四の巻と五百十五の巻と五百十六の巻と五百十七の巻と五百十八の巻と五百十九の巻と五百廿の巻と五百廿一の巻と五百廿二の巻と五百廿三の巻と五百廿四の巻と五百廿五の巻と五百廿六の巻と五百廿七の巻と五百廿八の巻と五百廿九の巻と五百卅の巻と五百卅一の巻と五百卅二の巻と五百卅三の巻と五百卅四の巻と五百卅五の巻と五百卅六の巻と五百卅七の巻と五百卅八の巻と五百卅九の巻と六百の巻と六百一の巻と六百二の巻と六百三の巻と六百四の巻と六百五の巻と六百六の巻と六百七の巻と六百八の巻と六百九の巻と六百十の巻と六百十一の巻と六百十二の巻と六百十三の巻と六百十四の巻と六百十五の巻と六百十六の巻と六百十七の巻と六百十八の巻と六百十九の巻と六百廿の巻と六百廿一の巻と六百廿二の巻と六百廿三の巻と六百廿四の巻と六百廿五の巻と六百廿六の巻と六百廿七の巻と六百廿八の巻と六百廿九の巻と六百卅の巻と六百卅一の巻と六百卅二の巻と六百卅三の巻と六百卅四の巻と六百卅五の巻と六百卅六の巻と六百卅七の巻と六百卅八の巻と六百卅九の巻と七百の巻と七百一の巻と七百二の巻と七百三の巻と七百四の巻と七百五の巻と七百六の巻と七百七の巻と七百八の巻と七百九の巻と七百十の巻と七百十一の巻と七百十二の巻と七百十三の巻と七百十四の巻と七百十五の巻と七百十六の巻と七百十七の巻と七百十八の巻と七百十九の巻と七百廿の巻と七百廿一の巻と七百廿二の巻と七百廿三の巻と七百廿四の巻と七百廿五の巻と七百廿六の巻と七百廿七の巻と七百廿八の巻と七百廿九の巻と七百卅の巻と七百卅一の巻と七百卅二の巻と七百卅三の巻と七百卅四の巻と七百卅五の巻と七百卅六の巻と七百卅七の巻と七百卅八の巻と七百卅九の巻と八百の巻と八百一の巻と八百二の巻と八百三の巻と八百四の巻と八百五の巻と八百六の巻と八百七の巻と八百八の巻と八百九の巻と八百十の巻と八百十一の巻と八百十二の巻と八百十三の巻と八百十四の巻と八百十五の巻と八百十六の巻と八百十七の巻と八百十八の巻と八百十九の巻と八百廿の巻と八百廿一の巻と八百廿二の巻と八百廿三の巻と八百廿四の巻と八百廿五の巻と八百廿六の巻と八百廿七の巻と八百廿八の巻と八百廿九の巻と八百卅の巻と八百卅一の巻と八百卅二の巻と八百卅三の巻と八百卅四

末ふ此万葉集畧解をべて三十巻寛政三年二月十日より
草と起して同八年八月十七日ふ稿成をまさてあは
ゐび教へ正して同十二年正月十日まてふみづうら
書ぬ稿手蔭とあり下も一筆ふて繰十年の間に
太成せるもの也巻首ふ寛政三年三月廿五日自序けり
次ふ凡例り○此書畧解と題すれども諸本と比校し
訓と訓正たる事呼嚔久覆極て勤るるのふして諸
注解の謬誤と改めたるあも初心の輩ふも會得し易く半
假字も て取迷き言語つきに書綴ると心へやも野鄙な
る事れく大簡ならば駁雜ならず仙覺の抄ハ古風ふし
て哥と解く小益ぬく圓珠菴の代辭記ハ精密ふ過て讀
ふも暇入り其餘諸名家の注釋少からねや此ふ得れを
彼ふ失ひ此畧解のごく全備しとるそのを見ば

板元

尾州名古屋本町通七丁目

永樂屋東四郎

三大考

鈴屋翁門人服部中庸著○天地國土のはりかたる初發より今の如成堅まるまでの其生出の傳ふもさらひ深く考得て伐ふ新たる前人ふ發の卓論を細に説明め古来の大疑を氷解したる霊の御柱と云書も專ら後ふ平田篤胤翁の著さもたる覺ゆ抑三大と八天地四方の三ふしてつらむと佛書に地水火風を此三大考ふ原きて述られ地泉とも

一冊

大と称をる ふ准へたる号るべけもゞ佛説と八天地ふ開ける

の興ふして漢儒の旧説と八表裏せ但後世に

神代の傳の西洋の測算ふよる如くれど是便自然に

ふ来往したるものを後ふ此考を熟覽も露不審き

通達なとがき支由るども此三大魂魄ふらでも

支み支し○本居先生の跋ふさやを深く物よくかむ

れる西の國々の人どりはいよいよざえうむ

ゞ出ざをし支をしめづらうりも考へ出たるかもく

をしくも考出ゐるうもかくてかを高天原も夜之食国をいぶっしきくまれくハうびぬをゑゑと稱せもて古事記傳十七の巻の次ゆ附らる

神代正語　三冊

書名かみよのまさかとや訓ゑし○上代の文ハ上代の語もて語傳けれぞそれ記せる書ハ皆漢文なれぞ文字遣ゆ拘らひて古言を失ひ古意を知ゆ害多し古事記ハ古言を傳ふるを旨とせるもたもバ文字の傍ゆ片假字つけて皆古語に訓返されつきど讀者を猶文字ゆ目の付て訓のかろをうふみをぬべきをうきひ神代の巻だゆ殘らバ假字ゆ書なし初心の輩ゆよみ習をせんとかをひみゐら順経しを門人横井千秋主おみじ心ゆかをひ發して此著述を請もけもバ翁甚悦ひ寛政元年四月五日のやどにかき終られたるよし序文ゆと巻首ゆも見えたを其躰裁ハ神代の巻と古事記と書紀とを合せて文のかもふきいやしと異ゐらぬは古事記よりていさうのたゞひとを二典別ゐハあげぞ同文の異なるを別ゐつけて又もかくもあをとをるし古事記ゆもれたる文を書紀を取て古語ゆうへしてあげとの二典ゆハやれさる文の異古書ゆみえをるとも一つ二つつけらもたり神名地名をべて物名を文字ゆてをろし一々訓注を附清濁のさゞり尤嚴重るを○初學の輩を先此正語をよみ口熟て古事記傳をもよむ時を學業の本末多じしく軽卒のうやまちぬうんうし○遠江人彩田土満序横井千秋主駁あり

出雲國造神壽後釋　二冊

往昔年々二月三月又正月四月ゆ出雲國造朝廷ゆ參を物献りて神壽といふを奏と有其儀式うをそめの文ゆらびをの神壽の詞を延喜式八巻祝詞の部ゆ載られて詞と調をいと古く他書ゆなき神代の傳を殘りいをじく先でたき古文章なれバ加茂真淵

翁の祝詞考ハ深くめでそふとみとれを鑒ずしてぞ祝詞をもじめ万の文をもかきつべけもとをろされてよ
ア世の人うりうやうの名文ハるをそめ本居
翁もいよ〳〵尊ぶれて此書の末ハ古風の哥をもろ
されさア○後釋とくし祝詞考の後の注釋といふ支ふて
祝詞考の文を悉あげ頭書ともらさずうつし出し次
小考の誤りを理ア自己発明の新説を微細ハ記さる○
寛政五年九月出雲國造俊秀主序ハり同八年刻成

御遷幸長歌

折本一冊

天明八年正月晦日内裡炎上寛政二年新内裡造營成り
ア十一月廿二日遷幸ましまは翁今年六十一歳都ハ上
ア御うつろひの大御よそひを見奉アよまれたる哥并
及哥二首なり御行列のミあアさま眼前ハ見るごとく
よみみしたる古風の長篇にして長哥よひ手本とれよ
まさるハらじ大舘高門御遷幸とえ拜まぬ田舍人の
ためよとて木に彫しひ

三代調和歌類題

六冊

三代とハ古今集後撰集拾遺集れ三代ハて大うと同じ
風調の哥ゐア詞も調もハらぬ支るく哥の意雄々しくも
やさしくもそべて花も実もそれとアてこれと大空の
月ハ名と一代々にくもらぬ詞の鏡ゐもハ定家卿の詠ハ
哥大概ハ詞ハ三代集といづ色からびしハのたまひ
おきてたアさもバ此類題ハ此三代の作者の哥まにより
み人れもらもぬも三代の作者のハつきゑるきふり
さず三代集くおとよりふて世々の勅撰古今六帖菅家
万葉哥仙家集夫木鈔ゐどよアぬき出しえらひ集め哥
ハ随て題を附もども原書の詞書ハ省うず四季恋雑に
類題して初学の手本とゐるしとも三河國吉田
の城ゐる岩上氏の家刀自登波子といふ哥よみ文かき
ゑらみかて女かハ免づらしき支ゐ俱しくそどてを
めたハ夏日の毫磨定りか祢つる支とひあとせたる
く中山美石實相院の故道ゐどのよし文政四年六月う
れゐる本居大平主の序文ふあアを今や都も鄙も哥道盛

小行きて初学の見るべき為として類題のあまた出来ぬ
ど大うさえらミ哥数のミ多きも風躰のようら
ぬまさ写誤などまじて害ふことなれ證例かもひ
かもず座右かかきても益ある支るし抑哥を詞やさし
く心をれかに品高くこそよむものるをも人小ま
さらむし新奇をのミ好むときハ姿も詞もふざさも異
様ふのみなて行てこもハ邪路ふかちへといふものみ
れぐとらくと此あらぬ支るき三代調類題とのミある
じて詠哥修行あるべきもと三代調をよみそらん
を和哥のもじ入たるを見易らんとてのさざなり
巻尾ニ文政五年春松齋藤井高尚ぬし跋あて

江戸職人歌合　二冊

東北院職人哥合鶴岡放生會職人哥合などの風ふ倣ひ
江戸當世の職人をあつめをもらが七月十日浅草の観
音堂ふ通夜し月く恋れ題もて哥よみさるを左右につ
がい名主自ら哥よミ判者ともて勝負をつけたる

やうにつくるふしれる戯筆ふて難陳もあり哥も例の
ぐく俗談をまじへあるがゆ今の狂哥者流のえせ哥ニも
あらを上手の口つきいちるく画も加へたるふその
さま見るがとしいや〳〵興深き哥合なて

一番左名主　右大屋　二番左儒者　右医者
三番左八卦見　右人相見　四番左いちと　右願人
五番左青物賣　右魚賣　六番左虫賣　右笛賣
七番左馬方　右車引　八番左呉服屋　右ふゝきや
九番左女郎　右藝者　十番左夜鷹　右船鯛頭
十一番左獄多　右乞食　十二番左鳶者　右臥烟
十三番左猪牙舟こぎ　右四ツ手駕かき　十四番左覚兵衛獅子　右軽業
十五番左そむや　右湯屋　十六番左紙屋　右茶屋
十七番左酒屋　右飯屋　十八番左みそ賣　右ざる賣
十九番左華結　右経師　廿番左屋根葺　右左官
廿一番左畳刺　右石切　廿二番左水〳〵や　右上菓子屋
廿三番左付木賣　右箒賣　廿四番左座頭　右山伏
廿五番左念佛宗　右題目宗

○石原正明弟嶺周文化五年五月十五日伊豫國ふてか

けり序あり文化二年七月十日浅草寺に於て書をろ所なり奥遊さろふ依て傳写と聴さる池南搢紳藤原春季図してを賜ふ珍重ふ子以為此屋封ぞべきれ世も猶四山賊あり日織人をして文化ふ溢せしむ堯舜の民ふ勝きろとのう重て珍重

右江戸職人哥合ハ磯部千貝聞

玉勝間　附目録一巻　十五冊

是ハ本居翁の随筆ふして若年より讀書の度抄録あり てやすつべきふもからぬ吏を始事に觸て見聞けり しこやの沙汰道にうれる教のミふもあらび花紅葉 ふよれる風流今昔都鄙よつさへたる土俗の習何と定 りたなくれく年頃筆のまふ〳〵書をさまもたるが 尋常の人はよしあしおやをとをたがひ古学者の為ふて 金よも換ふさき重宝ふなりぬ○尾張雅嘉云書體全く 随筆ふして古書とあるを記録の類多し中ふも記録の類 えの文化九年正月植松有信跋ふ云ふ是此ふて

ものがさら安つくろはずうきやり給へるハ今も吟づ から物うたまふやうふて此巻をくそかへし見るう たび小有信等とのうみ大人の御許ふさぶらひていい きうせるうしてちしうち聞ふ○初若菜ふてかもひ草 の巻まで翁の彫下なアふ以下ハ翁没後他筆ふて清書を初編を寛政六年刊行の 椿の十五丁以上も同じ ち三巻づ彫刻し目録一冊とそへて十五巻五度ふし て成就そるよし孫本居萬ア呂目録の後ふ云ふさる彼の 目録を十四巻中の件々下附とくそしくして見る人の 便宜とひ

○詩草れそぐ紙に為ふ玉がつまはみてあるろを野の へのそさびふと一ぢの巻の首ふ記てやりて劃線とせら

一の巻　初若菜　六十条　二の巻　櫻の落葉　四十六条　三の巻　ひちかれ　四十六条
四の巻　ますも草　八十条　五の巻　枯野のすき　四十七条　六の巻　かゝあめ　六十七条
七の巻　ふぢなみ　六十条　八の巻　紫の下葉　百十八条　九の巻　花乃雫　六十二条
十の巻　山彦　九十条　十一の巻　山ふき　八十五条
十二の巻　おもひ草　百十条　十三の巻　椿　九十二条　十四の巻　十五の巻　惣目録

發行書肆

江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同　日本橋通二丁目　須原屋新兵衛
同　淺草茅町二丁目　須原屋伊八
同　日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　両國横山町三丁目　和泉屋金右衛門
同　芝神明前　和泉屋吉兵衛
大坂心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　心齋橋通安土町　河内屋和助
同　心齋橋通博勞町　河内屋茂兵衛
同　心齋橋通安堂寺町　秋田屋太右衛門
京都麩屋町通姉小路上ル　俵屋清兵衛
尾州名古屋本町通七丁目　永樂屋東四郎

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan